

久留米教区

# 親鸞聖人入門講座

テキスト

— 吉 水 —

私たちの宗旨は浄土真宗です

- 【本尊】 …阿弥陀如来
- 【正依の経典】 …仏説無量寿経（大経）  
※三部経 仏説観無量寿経（観経）  
仏説阿弥陀経（小経）
- 【宗祖】 …親鸞聖人
- 【宗祖の主著】 …顕浄土真実教行証文類（教行信証）
- 【宗派名】 …真宗大谷派
- 【本山】 …真宗本廟（東本願寺）

※親鸞聖人の伝記には、不明確な部分が多く、ことがらによっては諸説あるものもあります。本テキストでは、『浄土の真宗』、『親鸞 生涯と教え』、『親鸞聖人伝絵 一御伝鈔に学ぶ一』、『はじめて読む 親鸞聖人のご生涯』（以上、東本願寺出版）、『まんが宗祖親鸞聖人』（難波別院）、『親鸞聖人 御絵伝を読み解く』（法蔵館）を参考にしました。

よし みず  
吉 水



吉水の草庵には老若男女・貧富貴賤を問わず、たくさんの人々が集まり、<sup>ほうねん</sup>法然上人の説かれる本願念仏の教えに帰依されていました。この吉水に親鸞聖人は、あらゆる違いをこえてすべての人々が、<sup>おんどうほうおんどうぎょう</sup>※1御同朋御同行として生きていくことのできる念仏者の①\_\_\_\_\_（仏法をよりどころとして、仏道を行わず人々の集まり）を見いだされました。そして法然上人やそこに集まる人々との聞法生活に、深いよろこびと充実感をもって過ごされていました。

しかしながら、共に聞法する僧侶の方々と、教えの受け止めかたの違いから議論になることもありました。

あるとき親鸞聖人は、「私の②\_\_\_\_\_も、法然上人

の②\_\_\_\_\_もひとつで、異なることはありません」といわれました。これを聞いた先輩僧侶は、「智慧第一と称讃される法然上人と信心が同じであるなどありえない」と非難しました。念仏者は弥陀の本願力によって救われるが、その本願を信じ念仏申すのは各人であるから、当然、知恵の浅深や努力の有無によって信心は異なるはずだという主張でした。

この議論に応じて法然上人は、「③\_\_\_\_\_（法然）が信心も、如来よりたまわりたる信心なり。<sup>ぜんしんぼう</sup>※<sup>2</sup>善信房（親鸞）の信心も如来よりたまわらせたまいたる信心なり。されば、ただひとつなり。別の信心にておわしまさんひとは、<sup>げんくう</sup>源空がまいらんずる浄土へは、よもまいらせたまいそうらわじ」（『歎異抄』）と諭されました。

この出来事は、「<sup>しんじんいちい</sup>信心一異の<sup>じょうろん</sup>諍論」と呼ばれています。ほかに「<sup>しんぎょうりょうざ</sup>信行両座」という議論もありました。

◇補注

※<sup>1</sup>ともに本願の教えを聞き、念仏を行ずる朋（とも）のこと。親鸞聖人は如来よりたまわった信心を共によるこぶ念仏者を尊敬して、御同朋御同行といっておられる。

※<sup>2</sup>聖人は自分のことをお手紙などで、善信房と名のっておられる。

## 僧伽(サンガ)

僧伽とは、インドの言葉を音写したもので、僧侶のことではありません。仏法をよりどころとして、仏道を歩む人々の集まりのことをいいます。「仏」(ブツダ、目覚めた人)、「法」(ダルマ、真実の教え)とともに、三つの宝として大切にされています。

帰敬式や法座のときに唱和する「三帰依文」は、三宝への帰依を誓うことばです。

## 信行兩座

吉水において、本願念仏の教えに生きることをたしかめた試みのことで、親鸞聖人の提案で行われました。

ある日の集いで、聖人は「この座を、阿弥陀仏より賜る信心によって往生する〈信不退の座〉と、自分が南無阿弥陀仏と口にとなえる努力によって往生する〈行不退の座〉に分けたいと思います。正しいと思われる座にお進みください」と呼びかけられました。

吉水には、300人以上の僧侶がおられましたが、ほとんどが行不退の座に着かれたか、また戸惑うばかりで判断がつきませんでした。信不退の座を選ばれたのは、親鸞聖人、聖覚法印、信空上人と遅れてやってきた蓮生房の僅か4人でした。

しばらくして、法然上人が「私も信不退の座に着きましょう」と仰せになり、往生に大切なのは、阿弥陀仏より賜る他力の信心であることを示されました。

この出来事は『御伝鈔』によって伝えられています。

☆話し合いのポイント例

- 信じるってどういうこと？
- 法然上人と親鸞聖人の信心と、私の信心
- 友との出会い
- 気になる？上下関係

**メモ**

# 『御絵伝』について

## 二幅（第七図）



左図 信行分判

右図 両座進言

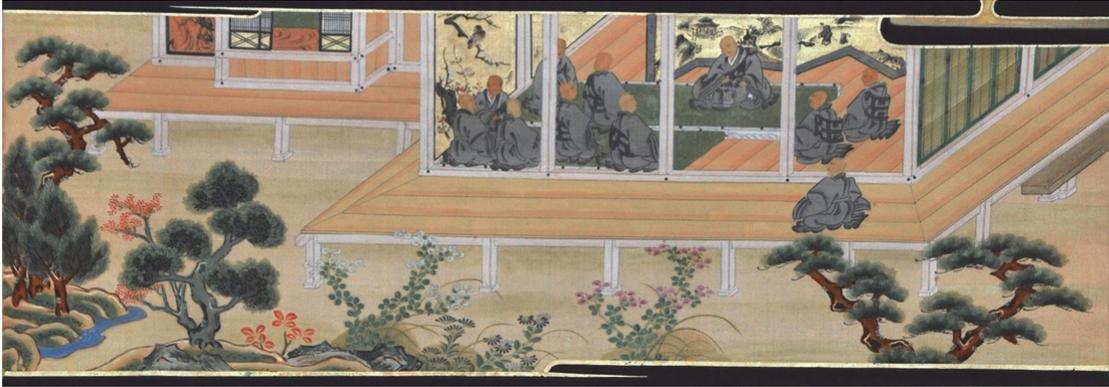
げんきゅう  
元久2年（1205）9月20日、親鸞聖人33歳のとき、吉水門下では、往生は何によって定まるのかという議論が occurred。

右図では、そのことを確かめたいと、師・法然上人に「しんぎょうりょうざ信行両座」の進言をなさっている場面です。中央に法然上人、左にて進言するのが聖人、右三人は上座よりしょうしんぼう聖信房・せいかんぼう勢観房・念仏房です。

左図は翌21日、往生は信心で定まるのか、それとも行で定まるのか、どちらの座に着くのかを尋ねています。右には行の座に居並ぶ三百余人の門弟、左には信の座に中央より聖人・せいかくほういん聖覚法印・しんくう信空上人。縁には遅れて参ったれんしょうぼう蓮生房（くまがいじろうなおざね熊谷次郎直実）が信の座に着きました。続いて、信の上座に法然上人が着かれました。一同皆、面目ない顔色を隠しきれない有様が描かれています。

# 『御絵伝』について

## 二幅（第八図）



### 信心諍論

第七図の信行両座の翌年、建永元年（1206）8月16日、法然上人の信心と門弟の信心とが、同じであるか否かという議論が occurred ました。

室内右側より聖信房、勢観房、法然上人、念仏房です。柱に顔がなかば覆われているのが親鸞聖人です。

聖人は、智慧才覚は法然上人とは比べることすらできないが、往生の信心においては同じであると主張されました。それに対して聖信房たちは、もってのほかと<sup>とが</sup>咎めました。そこで上人にお尋ねしたところ、自力の信心であれば異なるが、他力の信心は如来から賜るのだから同じであると仰せられました。

この話は聖人が唯円に語られたこととして、『歎異抄』にも記されています。

## 親鸞聖人ゆかりの地紹介

### ◇住蓮山安楽寺

安楽寺は、法然上人の門弟であった住蓮房と安楽房ゆかりの寺院です。

二人は鹿ヶ谷の草庵で念仏会を開いており、そこに後鳥羽上皇の寵愛を受けていた松虫姫と鈴虫姫が赴き、出家したと伝えられています。



この出来事により承元の法難がおり、二人は死罪、法然上人と親鸞聖人は流罪となりました。

帰京した法然上人が二人を偲んで一寺を建立し、安楽寺と名付けられたそうです。

所在地／京都市左京区鹿ヶ谷御所ノ段町21

交通案内／市バス「真如堂」下車、徒歩10分

### ◇二尊院（二尊教院華台寺）



二尊院の名は、「発遣の釈迦」と「来迎の阿弥陀」の二如来像を御本尊とすることに由来します。嘉禄三年（1227）におこった嘉禄の法難の際には、法然上人の遺骨を守るために、法然廟所から二尊院まで移送されました。

また二尊院には『七箇条制誠』が所蔵されています。法然上人は門弟たちの行動をいましめる文を起草し、署名させました。親鸞聖人はその87番目に「僧綽空」と署名されています。

所在地／京都市右京区嵯峨二尊院門前長神町27

交通案内／市バス「嵯峨釈迦堂前」下車、徒歩10分